

# 沿岸技術研究センターの役割を踏まえた 情報発信や広報活動について



渡部 要一

北海道大学大学院  
工学研究院  
土木工学部門 教授



岩波 光保

東京工業大学  
環境・社会理工学院  
土木・環境工学系 教授



大串 葉子

椋山女学園大学  
現代マネジメント学部  
教授



宮崎 祥一(司会)

一般財団法人  
沿岸技術研究センター  
理事長

## 1 「CDIT」60号を迎えるにあたって

宮崎(司会)▷今回は沿岸技術研究センターが創立40年を迎えることと、機関誌CDITは平成13年2月に創刊しましたが、たまたま機関誌も60号になります。機関誌での座談会は、これまで基本的には技術に軸足を置いたテーマが多かったのですが、今回は少し目先を変えて、情報発信や広報活動をテーマにします。

沿岸センターは沿岸域や海洋に関する技術の開発、それを普及させる使命があります。港湾や空港、いろいろなプロジェクトを技術面から支えてきています。一方で、行政や大学との学術的な研究や他分野、周辺分野との連携も図っていく役割もあると思います。そのために情報発信が重要なのではないかと意識して、40周年を迎えるにあたり、外から見た沿岸センターはどういうものかを意識しながら当センターを見つめていきたいと思います。

機関誌CDITにとどまらずホームページや論文発表会といった情報発信は、昔から一通りやってきています。

最初に、出席者の方それぞれから専門分野、最近の研究活動、それにまつわる情報発信や研究成果の広報をどうし

ているか。あるいは、どう対外的に浸透させようとしているか等について、現状や問題意識をご紹介いただければと思います。

## 2 教育の中での伝える工夫

渡部▷2016年に北大へ行って7年ほど経ちますが、とにかく若い人たちに港湾・空港のことを知ってもらおうということで授業をやっています。2年生では、土木に所属した学生の最初の科目に「社会基盤と国土政策」という授業があります。北大の工学部には土木という学科はなく「社会基盤学コース」と「国土政策学コース」、40人ずつのコースになっています。

いろいろな先生が授業をやるのですが、私はそのうちの4回分を持っており、そこで港湾や空港のおもしろいことをたくさんしゃべっているつもりです。

特に学生たちに興味を持ってもらえているのが、港湾・空港で言うとうどんでも空港の方です。港湾空港技術研究所時代に羽田のDラン(D滑走路)工事があった、その時には研究所が技術支援する部隊のトップにいる状態でした。その経験を学生たちにしゃべると、みんなすごく喜ぶ。

レポートを書かせると、驚くほどいいレポートを書いてきます。

北大の場合7割の学生は道外から来ているので、みんな飛行機に乗ってきます。ですから飛行機は学生たちにとっても身近なものなので、空港に関してはものすごく興味を持ってもらえます。

一方で、港湾の話は結構難しい。港湾は近づけないから見たことがない。そんな中でも「コンテナ船はすごいんだぞ」とか、パナマ運河をギリギリ通るコンテナ船の写真とかいろいろなものを見せながら港の技術を紹介し、かつ埋立でつくっている空港と共通の技術はたくさんある、港湾局はこれだけ頑張っているという話をする。

学生たちは「国際的な仕事をしたい」と言うから、空港づくりも港づくりもみんな国際的な仕事だし、海外へ行く人も多いという話をしています。最初はみんなすごく興味を持ってくれます。

私は地盤工学、土質力学が専門で、しかも分野は圧密沈下で地味なんです。三十何年間の研究人生の中でひたすらそれをやって軟弱地盤の専門家になって、今は国際地盤工学会で軟弱地盤のテクニカルコミッティ（技術委員会）のチェアマンをやっていますが、とにかく地味な専門分野なのです（笑）。

学生は「先生の授業は楽しかった」とかいろいろとってくれるのですが、最後の最後になると研究室には来ない（笑）。それが私としては残念ですが、港湾局に興味を持ってもらうという意味では、おもしろい授業がたくさんできているのではないかと思います。

**司会**▷80人の学生に港湾・空港のよさ、圧密について、土質について伝えて、その学生さんが10人の友だちや親戚、親にしゃべれば港湾のよさや圧密沈下とは何か800人に伝わる。まずは学生さんにしっかり理解していただくのは重要なことです。教育も情報発信であり、その中で伝える工夫をしているということですね。

**渡部**▷そうです。たとえば関西空港は、1期島は14.5m、2期島は18m沈む。北大の工学部のビルは6階建てなので、18mはほぼビル1個分沈んでしまうんだよという話をしています。でも、埋め立てる時にはその2個分を埋め立てているんだからねと。さらに大きさはと言うと、札幌の街の北の方に札幌道という高速道路がありますが、そこから南へ、札幌駅や大通り、すすきのを通り過ぎて中島公園のあたりまでが関空島の大きさです。日本一広い北大の敷地の幅を有する島を2つもつくったんだという話をすると、規

模が想像できないくらい大きい。そういう話をいろいろとしています。

**司会**▷そういうたとえを使って、あるいはトリビア的な話題として伝えると、さらにそれがまた広がっていく。

### 3 入口を魅力的に 入口をたくさん設ける

**岩波**▷私は今たまたま大学のアドミッション部門に所属していて、高校生にいかにか本学に来てもらうかという活動をしています。まずは大学に来てもらわないといけないし、土木や建設系を選んでもらわなければいけない。最近、高校生などと話をしているのは、こちらが思っているような広報活動では全然ダメだということです。入学案内の立派な冊子をつくる、入試ガイドや過去問集を作る、ホームページを整えるぐらいでは彼らには全然足りていない。まず、書き物を読まない。ホームページも、字ばかりだと読まない。ツイッター、SNSみたいな、短文でいかに魅力を発信するか。キャッチーにつかむと読んでくれる。われわれ古い世代は「とにかくきれいな絵をつければいい」と走ってしまいがちですが、そういうものは今の高校生には全然響かない。

入口をいかに低くして入ってきてもらうか。それがSNSなのかもしれないし、動画も長いものはだめです。模擬講義を1時間ぐらい流しても誰も見ない。「30秒でわかります」だと見る。そこでおもしろいと思ってくれたら次へ行く。そのコンテンツがあるかは問題ですが、入口を魅力的にして関心を集めることが大事だなと。

今の若い人の周りは情報にあふれています。われわれの時は情報を取りに行かないと辿り着けなかったのですが、今は向こうからワッと押し寄せてくる。どうでもいいものには見向きもしない。若い人の話を聞いていると、いかに関心を合わせるかが大事だと思います。

もうひとつ。何かイベントがあると、今までは大学のホームページに「〇〇説明会をやります」でしたがそれでは誰も見ない。その情報をツイッターなどに流して、学生がアカウントを登録してくれるとひとまず情報が来る。まずは入口をたくさん設けるということです。

### 4 地域の人との対話

**大串**▷私は2000年3月に大学の博士号を取ったんですが、ちょうどITブームだったこともあってIT投資と生産性の

向上をずっと専門にしてきました。単にITに投資しただけではもちろん生産性は上がらない。現場のコミットメントがどれほどあるかによって生産性が変わってくる、ということをやってきました。そうすると「こういうシステムを導入します」という時の合意形成が大事で、どういう合意形成をやっていけばいろいろな投資に効いてくるのかということに関心が移ってきました。

例えば「ここに道路が通るけれども自分たちには関係ないよね」という道路があるとします。でも、SA・PAを使って地域をどうアピールしていくかとなると、地域の人たちが自分事としてとらえてくれるようになり、強くコミットメントしてくれるようになる。こんな土産物を置いたら地域のアピールになるのではないか、こんな掲示板、案内板を置いたら地域の中に入ってきてくれるのではないかとアイデアも出てくる。特に新潟大学の時代は、学生と地域の観光系の方たち、時々地域の小学生も入ってワークショップを盛んにやっていました。

「自動販売機を置きましょう」というアイデアもありました。「何の自動販売機を置くんですか」と訊いたら、「近くにある温泉のチケットや道の駅の割引券です。買うと地域に降りてくれて、休憩もしてくれるのももとのSA・PAの役割も果たせる」と言うんです。そういう議論に参加することによって、学生たちも地域でいろいろな努力をしていることがわかり、社会基盤に対しての投資に違和感を抱かなくなる。

「どうしてこんなところに道をつくる?」、「どうしてこんなところに立派な港湾が必要な?」という時に、学生を連れて行って地域の人と対話してもらおう。行政の人から「こういう機能がある」と聞くだけではなくて、地域の人が港湾や道路、空港に対してどんな思いを持って利用しているかを聞くことが、地域にあるインフラを継続して発展させて使っていく方向性に結びつくかなと思って、連れ出すようにしています。

経済系はどうしても座学が多いですが、座学だけでは投資効果がなかなか腑に落ちないところがあります。実際に行ってみて、どんな使われ方をしているか、どんな地域貢献、地域の強靱化を含めて役に立っているのかを見て、思いを聞いてもらって、議論をする。投資効果をどう測定すれば単なる生産性の向上以外の何かが測定できるのかを話し合うことがあります。思いや金額で測定できない投資効果をどう考えるのかは、インフラ投資にとって評価すべき重要な要素だと考えています。

## 5 地味なところをどう伝えるか

**司会**▷現地に出る、現地と対話することが伝えることだという、重要なお話を伺いました。先ほど渡部先生は「土質、圧密、軟弱地盤は非常に地味な世界だ」というお話をされました。世の中にすごく役に立っているわけですが、知る人ぞ知るということになっている。世の中に「圧密、軟弱地盤対策はこんなに重要なんだぞ」というところを軸足にした活動みたいなものはされていますか。

**渡部**▷それはとても難しいことです。圧密は現象が目に見えない。ゆっくり起こる現象で、だけど終わってみると結構大きい。専門でやっている学生たちでさえ「こんな地味なこと」と言うぐらいで、ましてや一般の方には難しい。

一方で、広報活動ではないですが、大阪で万博が行われ、その横ではIRの話もあります。たとえば圧密沈下が起こると、一般の埋立地なので、羽田空港もそうですが地盤が沈下する。だけど建物は杭で支えられていて沈下しない、段差ができる。それをどうするのかという話は、一般の市民が目にする部分です。

放置したら杜撰な沈下予測と言われますし、しっかりとケアしていけば立派な埋立地の新たな土地ができたと思える。その意味では、地味だけでも、しっかりとフォローアップしていくことが広報活動の一環ではないかなと。

羽田のDランもそうですが、港湾や空港の関係者は一般市民へのアピールが足りない気がします。本当はすごいことをやっているのにすごさを全然言わない。われわれは当たり前前と思っていますが、当たり前ではないと思います。それをちゃんとと言わない。言う方法は難しいですが、しっかりやっていきたいと思っています。

## 6 一般公開、出前講義、ホームページ…

**司会**▷問題意識は一緒です。沿岸技術研究センターもやっていることは地味です。できたものは「港ができたね」と注目されますが、その前の段階で大学の先生のご指導をいただきながら技術的な検討をしていることは知らない。そこが今回の一つの問題意識です。

岩波先生、港空研では一般市民に開放して、研究活動を地域住民に伝えていらしたと思います。

**岩波**▷大学では港空研みたいな一般公開はやっていませんが、たとえばオープンキャンパスです。これは完全に中学

生、高校生向けで「将来考えてね」ということでやっています。もっと広く考えれば、まずは工学を知ってもらおう、理系に興味を持ってもらおうという意味では、一般公開に近いものかとは思いますが。

**大串**▷大学では、出前講義に呼ばれているいろいろな高校を訪問して、「こういう学問分野があります」と教員や生徒にわかりやすく話す機会があります。場合によっては中学校にも出向きます。

たとえばYouTuberになりたい人はたくさんいますが、その将来設計はキャリアプラン的に危険だという話をしにいったりもします(笑)。先方の要望にお答えして、「それを学問で解析するとこうなります」という形で紹介することもあります。市民講座に出向いて地域の魅力についてお伝えしたり、地域のインフラの貢献をお話ししたり、機会はたくさんあるかと思えます。

今はどこの大学も女性の研究者の方たちの育成に積極的で、「こういう研究分野がある」「私のキャリアプランはこうだった」などの具体例を出してもらおうなど、さまざまなテーマに応じて最適な講師を用意して、すぐ要請に応える体制を整えていると思います。

**司会**▷先生方はホームページの運営はされていますか。

**渡部**▷北大では、学科のホームページと研究室のホームページがありますが、一般の人に向けたものではなく、学科のホームページは新生向け、あるいは1年から2年になる時のコース選びで活用できるものになっています。研究室のホームページはどちらかと言うと3年から4年になる時、どの研究室を選ぶかを対象につくってある感じです。4年生で研究室に配属されるので、学生は「この先生はどういう先生か」を見てくる。

**岩波**▷受験者を増やすため以外にわれわれの活動方針や成果を発信する意味では、ホームページをしっかり整えて発信することが第一です。研究成果であれば論文が大前提ですが、論文を読むのは限られた人です。広く一般にアピールする意味では、まずはホームページが一番かと思えます。研究室でどういう活動をしているかは、各研究室がオリジナリティを発揮しているいろいろなホームページをつくっています。そこでカラーが出てきますし、3年生向け、一般向け、あるいは友だち向け、いろいろな趣向を凝らしたホームページがつくられているので、見ると非常におもしろいと思います。

**大串**▷工学系の先生たちは見せるものがあるので、おもしろいと思います。

**岩波**▷実験室を見せたりしています。

**大串**▷実験室そのものがおもしろいですよね。計画・交通研究会というところに入っているのですが、そこで「研究室探訪」というものがあります。理系の先生の研究室はすごくおもしろいので研究室を訪ねて、どんな研究をされているかを会報に載せたりしています。たとえば折り紙の研究者がなぜ東大工学部にいらっしやるのかというと、その技術が衛星の太陽光取得のための折り畳みの技術に生かされているという感じですね。われわれ文系の研究者は見せるものがないですが、工学の人は見せるものがあると思います。

ほかには、クラウドサービス推進機構の理事をやっていますが、広報関係では、おもしろそうな講師に来ていただいて、Peatixという宣伝媒体で宣伝して、50~150人ぐらいの方をZoomで集めて講演する企画を月1回やっています。Peatixの宣伝媒体がメルマガ的に流れてくるので、全然繋がっていない方もテーマに興味があれば参加していただくことができます。

たとえばプログラミングの世界でも、コードを使わずに社内のシステムを構築できるものがあります。ローコードがノーコードになって何が変わったか、ChatGPTを中小企業で活用するにはどうしたらいいか。おもしろそうなテーマをおもしろそうな講師に講演をお願いして、組織をPRしています。そうした試みは新しい知識に触れられるので、自分の楽しみでもあります。

**司会**▷今、Zoomの講習会の話もありましたが、これまで3年間はコロナでした。会議や授業でご苦労や工夫をされたと思います。お困りになった点もあると思います。情報発信という点でコロナにまつわるお気づきの点、あれはあだったなというものはありますか。

**渡部**▷今はだいぶ解消されましたが、授業をオンラインでやると、どこまで伝わっているのか。最初のうちは学生に顔を出すように言っていたのですが、顔出しさせるとそのハードコピーを撮られたりしてしまうから、学生の顔は見せないようにしたとか。だけど、本当に出席しているかわからないので、「チャットで返事をしろ」とか、いろいろ工夫をしながら授業をやりました。学生とのコミュニケーションという意味では、対面ができないのは残念でした。授業だと学生たちはうなずく、つまらなそうな顔をする、いろいろありますが、それが見えないのが残念だった。

**大串**▷一人漫談をしているような気になります。理解できたかな、おもしろいと思ったかな、と悩んだりしていました。

**渡部**▷コロナの時は日程調整がしやすかった。北海道にいると東京の会議は1日かかりですが、Zoomだと「この2時間を確保すれば会議に参加できる」とか。

**岩波**▷よくメリットで言われるのは、ウェブで授業をすると教室で話をされるよりも自分の部屋でリラックスして聴ける。画面も目の前なので、教室の一番前に座っているわけです。画面も大きいし、よく聴こえる。「集中できる」と聞いたことがあります。

コロナ中は「録画して繰り返し見られるようにしてください」と大学から言われていたので、それをオープンにしておくとは積極性のある学生は何回も見ると。わからなかったらもう一回見られる、非常によかったと。それをコロナが収束してもやればいいのに、やらない(笑)。本学の場合、今リモート授業は原則禁止です。

**司会**▷ハイブリッドではなくて、禁止なんですか。

**岩波**▷はい。やる場合は事前に届け出て許可を得る。

**大串**▷文科省の方針です。

**岩波**▷リアルで伝えないと伝わらないものがあるということばかりがクローズアップされて、ウェブのいいところが落とされた。うまく使えばいい、もったいないなと思います。

**大串**▷教育効果的に使い分けができるかなとは思いますが。会議でZoomの選択肢があると、われわれも地方にいて参加しやすい。なかなか来ていただけない方をゲストスピーカーに呼びたい時も、オンラインで参加していただく。ゼミは対面でやっているけれども、たとえばスペシャル講師にZoomで参加していただく講演も気軽に行えるようになりました。そういうプラスはすごくあったかだと思います。

## 7 沿岸センターの情報発信は

**司会**▷さて、後半の話題になりますが、外から見て沿岸センターの情報発信や広報活動をどうしていったらいいか、社会との繋がりをどうしていったらいいか。広いテーマですが、お気づきの点やアドバイスがあればいただきたいと思えます。

**大串**▷沿岸センターのホームページを拝見すると、官公庁系のホームページと同じで、魅力がないわけではないのですが、あえて探訪していただくとはならない。そのあたりがすごくもったいない。

新潟大学にいた時に情報システム系の科目を持っていて、学生に20ある政令指定都市のホームページを見てどういう印象を持ったか、良し悪しを書き出させました。そし

て、その後、自分の出身地や新潟県内の市町村などのホームページとの比較をしてもらいました。そこで、人口が多いところはホームページを作成するためのデータが豊富で予算をたくさんつけられるのでどうしても分かりやすく魅力的になっていくことを学生たちは発見しました。つまり、財政基盤が大きな要素であることが分かるのです。最後に、少ない人口で大変だけれども「こういう要件は備えていて欲しい」という要望書を市町村に送って、授業は終わりとなります。

そういう意味において、沿岸センターがどこに何を届けたいホームページをつくっているのかが伝わりにくいかな、というところがあって、ホームページの中で、沿岸センターはどこをターゲットにしているかを最初に教えてほしいと思いました。沿岸技術とはそもそも何?ということから「ここをターゲットにしている、これだけスペシャリストがいます」という方が興味を持ちやすい。

それと、たとえば防災とメンテナンスとSDGs対応が今のテーマですというなら、それに沿った形にする。学生も子どもたちもそうですが、SDGs、カーボンニュートラルでどこがどういう活動しているのかを調査する活動をやります。彼らに響くタグとかでつくっていないと、なかなかたどり着いてくれない。各々のコンテンツはおもしろいのに知っていただけなくてもったいないなという印象を持ちました。たとえば、「SDGs、港湾」と入れたら沿岸センターのページがトップに来て、利用者もアクセスしやすく、調べやすくなるので沿岸センターの社会的な役割や技術力を伝えやすくなると思います。

## 8 テーマ毎に切り出せるといい

**大串**▷それと、機関誌は会員の皆様に配布されているかもしれないですが、テーマを少し切り出して、興味を持ったところを読みやすく出していくととてもいい。たとえば防災に関してこういう記事の特集しているから、防災に関する記事だけを取り出して並べていただくといいと思いました。

**岩波**▷沿岸センターのホームページはときどき見ますが、必要十分なコンテンツはきちんと揃っていると思います。機関誌も非常におもしろい内容で毎回読んでいますが、今言われたとおりのたどり着きたいところに行けるかどうか。タグ付け機能や検索機能がまだ不十分かと思うので、まずは垣根を下げる。まずは知ってもらい、見てもらうきっかけ

をいかに作るか。SNSで発信するとか、記事も4ページは読まないけれども、ダイジェストで短くしてそれだけを発信する。そういう一工夫があれば、今あるコンテンツを十分に生かせるのではないかと。全部作り直す必要はまったくないと思うので、入口やタグ、検索、そういうところが要るのかなと思います。

## 9 研究者を紹介する

**大串**▷魅力的な研究者がたくさんいらっしゃるのですから、研究室を探訪して「この先生はこういう研究をやられています」とやさしく紹介する関係研究者紹介ページとかを出していただくのはいかがでしょうか。先ほどの渡部先生の関空のお話は大変おもしろかったです。「では、どういふふうに経済効率を上げて今の機能を維持していくんですか」という話をインタビューしていく。それを中学・高校生ぐらいにわかりやすくすると、「渡部先生のところへ行って勉強して、港湾関係の浚渫の会社に行ける将来が開けるな」と思ってくれる子どもたちが出てくれるかもしれません(笑)。皆さんが持っているコンテンツをもっと上手に見せられるように編集したら、とてもいいのと思いました。

**岩波**▷「研究室探訪」みたいなものは、もしかしたら港湾関連の組織みんなで一緒にやってもいいのかもしれない。そうすると予算も人もかけられるので、かなり立派なものができる。「研究室探訪」は一つの例ですが、共同するものは共同してやった方がいいし、うちしかできないところはうちとすみ分けした方がいい。

**渡部**▷沿岸センターのホームページや機関誌は、コンテンツとしてはよくできています。写真がたくさん使われていて人の写真もある。どの人が誰かということ世の中に見せて「この人はこういう人なんだ」とわかる広報誌になっている。人が見えるのは非常にいい。ただコンテンツのほうも大事で、人を強調しすぎるのもよくない。いいバランスを考えて作ったらいいかと思います。

## 10 バックナンバーの記事を検索できるように

**渡部**▷正直な話、CDITを読んでいると勉強になります。世の中はこういう方向に向かっていて、こういう技術があって、本当に勉強になる。学生に読ませたいと思うぐらい、いいコンテンツです。ただ、ホームページに掲載しているバックナンバーは、通読しないと中身がわからないホー



ムページの構成です。バックナンバーでも最新号でもいいですが、引くと頭からしか読めない。いい記事というのはページごとに、コンテンツごとにアクセスできると、よりいいと思います。検索することが大事なので、検索でヒットしたものがバックナンバーのトップページに行ってしまうと、まず全体をダウンロードして、その中から記事を探して、となってしまう。ヒットしたものは、そのページに行きたいんです。

**大串**▷われわれも記事を探す時は必要な部分だけダウンロードして、プリントアウトします。そうした利便性はとても大事だと思います。情報の見せ方を工夫されたり、ダウンロードしてもらえただけでも全然違うと思います。リアルにものを配るという発想ではない方がいいのではないのでしょうか。

学生にURLを送って「開いたら論文のテーマに関係するところが出ていますよ」と教えたりする時に、1冊丸ごとのURLではなくて特集の部分のURLだと学生に伝わりやすいのでありがたいです。少し整理されるだけでいいと思います。

オンライン上で取れる、取れないに関しては、編集能力がとても大事だと思います。いいものを作っているのに埋もれているのはもったいない。少し編集し直すだけで、ホームページの稼働率はすごく上がるのではないかと思います。

## 11 データをどう活用するかが重要

**司会**▷「こういうコンテンツがあったらいいのではないか」というのはありますか。

**岩波**▷誰にとってあったらいいのかですね。職員に対してか、市民に対してか、学生に対してか。

**大串**▷誰に向けて宣伝したいのか。全員に向けて宣伝したい。それが今のマーケティングで一番よくないと言われていて、コアな人に届くようにやっているけどジワジワと周りに広がっていくことを重視しています。専門性の高さを保ったままいかにわかりやすく解説するかに挑戦するのが大事だと思います。

**渡部**▷防災の話で防波堤の話を検索したいと思ったら防波堤に関連する記事が出てきて、それを見ていくとこれだということで、そこにすぐ飛べるとか。地味な圧密の話も、沈下の話で検索したら出てくる。そういう作りになると、いろいろなレベルの人をターゲットにできると思います。

**大串**▷そうですね。去年の3月号のCDITで、「データベースが持つ国際競争力」と書かれています。ただ、どうやって活用していくかがまだまだ煮詰まっていないなと思うんです。沿岸センターのホームページもたくさんデータ蓄積されていてとても魅力的なのですが、料理の仕方、材料の提示の仕方がもったいないなと思います。データを持つことはとても大事ですが、利用者がどう使うかという方向から考えるアプローチも大事かと思っています。

## 12 まとめにかえて

**司会**▷ありがとうございます。今日は大変有益なお話を伺うことができました。最後に一言ずつお願いいたします。

**大串**▷ありがとうございます。最初に呼ばれた時は「どうしよう、私の門外漢ぶりは甚だしくお役に立てるのかしら」と思ったのですが、関係するところでお話ができとてもよかったです。

今回、仕事も兼ねてという意味で読ませていただいたら非常におもしろい。こんなおもしろいものをPRせずにやっていたら、ただ、探しにくくなっているのがもったいないと思いました。いいものを作成されていることに自信を持っていただきたいです。同時に、うまくPRできていないことに関して急ぎ広報に注力して魅力を発信していただき、さらに先生たちやお弟子さんたちの日々の学習や論文に対して、貢献できる編成にさせていただけると、もっと読んでいただける機会が増えて貴誌の魅力をお伝えできのかなと思いました。

**渡部**▷今日は色々とお話が出ましたが、コンテンツがよくできているのは正直なところだと思います。沿岸センターがこれまで手を抜かずに、しっかりとした調査・研究活動を

してきたということだと思います。

ただ、広報するにはやり方がある。情報をいかに発信するかは重要で、さまざまなレベルの人がアクセスしてきた時に自分がほしいものにすぐ手が届く。こういう状況になっていないとせっかくのものが宝の持ち腐れになって、単なる記録になってしまいます。記録ではなくて活用してほしいわけですから、活用できるコンテンツの見せ方を工夫していただけたらすごくいいことになる。40周年、「CDIT60号をきっかけに変わったぞ」というものがあると非常に嬉しいと思います。

**岩波**▷沿岸センターの一番の特徴は、高い専門性だと思います。そこをしっかりと広報する、発信することが大事だと思います。

市民にも沿岸センターをもちろん知ってほしいですが、そこに労力をかけるよりはまずは玄人に対してアクションをして、そこからじわりじわりと広げて行く方が沿岸センターの特徴に合うのではないかと思います。

もう一つは、広報したからにはフィードバックが欲しい。それを取れる仕組みになっているのか。機関誌にしろ、ホームページにしろ、お客様のページ、アンケートでもいいですが、それがちゃんとできているのかが気になりました。

**司会**▷大変有益なご意見、いろいろなことに気づかされました。どうもありがとうございました。本当にいい座談会になりました。これを機会に沿岸センターはいい情報発信に努めていきたいと思いますので、引き続きご指導をよろしくお願いします。ありがとうございました。

